

それでは、肉による私たちの先祖アブラハムのばあいは、どうでしょうか。もしアブラハムが行ないによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。しかし、神の御前では、そうではありません。聖書は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義と見なされた。」とあります。働く者のばあいに、その報酬は恵みでなくて、当然支払うべきものとみなされます。何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。ダビデもまた、行ないとは別の道で神によって義と認められる人の幸いを、こう言っています。「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。主が罪を認めない人は幸いである。」それでは、この幸いは、割礼のある者にだけ与えられるのでしょうか。それとも、割礼のない者にも与えられるのでしょうか。私たちは、「アブラハムには、その信仰が義とみなされた。」と言っていますが、どのようにして、その信仰が義とみなされたのでしょうか。割礼を受けてからでしょうか。まだ割礼を受けていないときにでしょうか。割礼を受けてからではなく、割礼を受けていないときにです。彼は、割礼を受けていないとき信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしるしを受けたのです。それは、彼が、割礼を受けないままで信じて義と認められるすべての人の父となり、また割礼のある者の父となるためです。すなわち、割礼を受けているだけでなく、私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父となるためです。というのは、世界の相続人となるという約束が、アブラハムに、あるいはまた、その子孫に与えられたのは、律法によってではなく、信仰の義によったからです。もし律法による者が相続人であるとするなら、信仰はむなしくなり、約束は無効になってしまいます。律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。そのようなわけで、世界の相続人となることは、信仰によるのです。それは、恵みによるためであり、こうして約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。「わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした。」と書いてあるとおりに、アブラハムは私たちすべての者の父なのです。このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、「あなたの子孫はこのようになる。」と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだ死んだも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。しかし、「彼の義とみなされた。」と書いてあるのは、ただ彼のためだけでなく、また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです。主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。

1 信仰の原理

私達は、信仰の原理について学んできました。

信仰の原理を説明するため、パウロは第一番目に、「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができない」と言いました。神を信じない異邦人達、偶像礼拝者達、その人達は罪人である。ところが、宗教に熱心で、律法を行い、正しいことを行うのに熱心であったユダヤ人に対しても、彼は罪があると責めたのです。ユダヤ人は、パウロから、全く驚きのことばを聞きました。異邦人を罪人と呼び、自分達を義として、彼らは苦勞して、努力して、正しいことを行おうとしていたのですが、パウロはそんなユダヤ人を罪人であると説明したのです。義人はいない。一人もいない。

どうして、義人はいない、一人もいないかという、全ての人は罪の中に生まれたからだというのです。

リンゴの実を見た時に、「これはリンゴの実だから、この木はリンゴの木」と、結果から見る判断する見方があるでしょう。もう一つは、「この木はリンゴの木だから、リンゴの実を結ぶに違いない」と原因から見る見方があります。聖書は、あとの見方をします。「人は皆、罪人として生まれてしまう。だから、罪を犯すのだ。」と見るのです。罪を犯したから罪人なのではなく、罪人だから、どうしても罪を犯してしまうとパウロは言うわけです。すべての人が罪の中に閉じ込められている。すべての人が罪を犯したために、神からの栄誉を受ける事ができない。

ところが、信仰の原理によって、人は義とされることができる。4つのキーワードがあります。 1 ただ神の恵みに

より 2 キリスト・イエスの贖いによって、3 価なしに 4 しかし、その代価はキリスト・イエスの血によるのである。これが信仰によって義と認められる信仰の原理です。

2 報酬ではなく、恵み

パウロはその信仰の原理をさらに明確にしようとして、この4章が始まります。パウロはここに、二つの大切な実例を挙げているのです。ダビデとアブラハムです。

「それでは、肉による私達の先祖アブラハムの場合は、どうでしょうか。もしアブラハムが行いによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。しかし神の御前ではそうではありません。聖書は何と言っていますか。『それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義とみなされた。』とあります。働く者の場合に、その報酬は恵みではなくて、当然支払うべきものとみなされます。」

あなたがマクドナルドにアルバイトに行つて、一週間後に給料をもらうなら、それは恵みではなく、報酬と言います。あなたの労働に対する支払いです。しかし、もしあなたが面接に行った時に、「よくいらっしやいました。1週間分の給料をさしあげます」と言われたら恵みですね。そのような店を私は紹介する事ができませんが。彼らは、働きに対しては当然の支払いをしますが、何も働かないのに給料をくれることはしないのです。しかし、聖書はこう言います。

「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。

ダビデもまた、行いとは別の道で神によって義と認められる人の幸を、こう言っています。「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。主が罪を認めない人は幸いである。」

3 ダビデは赦され感謝した

ここに、パウロは二つの実例、しかも、イスラエル人が最も誇る人、彼らの父アブラハム、イスラエルの歴史の中で最も輝かしい人物、最高の王ダビデの二人です。

ダビデは姦淫、そして殺人という、恐ろしい罪を犯してしまった人です。しかし、神の御前で悔改めたときに、彼は罪の赦しをいただき、その罪の赦しが嬉しくて、詩を書きました。詩篇32篇です。「不法を赦され、罪を覆われた人たちは幸いである。主が罪を認めない人は幸いである」 神の御前で悔い改めて、罪の赦しをいただいた。神のあわれみを信じて、このいつくしみをいただいたのですが、ダビデはそのことによって至上の幸福を体験したのです。

詩篇103篇の中で、ダビデは「主のよくしてくださったことを、何一つ忘れるな」と言つて、主の恵みを数えますが、真っ先に挙げたのは「主は、あなたのすべての罪を赦し」でした。王になったこと、財産を得たことではなく、罪赦されたことが、ダビデにとって何よりも大きな恵みだからです。

ダビデは生まれてから8日目に割礼を受けた人であり、ユダヤ人です。

4 異邦人アブラハムが義と認められた

ところが、もう一人パウロが紹介するアブラハムの場合は、元祖ユダヤ人であり、もともとは異邦人だったのです。ユーフラテス川のそばに発生した最古の文明、メソポタミヤ文明の大都市、カルデアのウルで誕生し育てられた。ジググラトというバベルの塔のような塔の上で、偶像が礼拝されていたのですが、彼の父親はその偶像、そして偶像礼拝のための器具をつくってビジネスをし、成功した人だと言われています。ですから、父親もアブラハムも、ユダヤ人ではなく、もともとは偶像を礼拝し、偶像の製造販売をしていたのです。ですから、アブラハムは異邦人でもあった。そしてユダヤ人でもある。割礼を受けたときに、彼はユダヤ人になりました。

私達も、元は異邦人でしたが、洗礼を受けてクリスチャンになりましたね。

ところで、アブラハムが割礼を受けたのはいつか。信仰を持つ前に割礼を受けたのか。割礼を受けてから信仰を持ったのか。彼が義と認められたのはいつなのか。「アブラハムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」創世記の15章、86歳の時にイシュマエルが生まれる。それよりも以前のことでした。それから15年くらい経つて、99歳の時に、彼は割礼を受けているのです。信仰によって義と認められるのが先で、義と認められた者が、その証印、

しるしとして割礼が与えられたのでした。

ダビデの場合は、割礼を受けてから信仰によって義と認められた。アブラハムの場合は割礼を受ける前、異邦人の時に信仰によって義と認められ、その後で割礼を受けた。「割礼を受けているか受けていないかは、大事なことはありません。大事なのは、新しい創造です」とパウロは言っています。

ここにおいて、二つの実例をもって、信仰によって義と認められるのはユダヤ人だけではなく、異邦人もそうだ。また、異邦人だけが信仰によって義とみとめられるのではない。ユダヤ人も信仰によって義と認められるのだと言っているのです。

5 信仰により 恵みにより 約束により

16 節「そのようなわけで、世界の相続人となることは、信仰によるのです。それは、恵みによるためであり、こうして約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。『わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした。』と書いてあるとおりに、アブラハムは私たちすべての者の父なのです。」

ユダヤ人達はアブラハムを父と呼び、私達クリスチャンはアブラハムを信仰の父と呼んでいます。クリスチャンはアブラハムと血縁関係があるわけではなく、私達の祖先ではないのですが、私達の信仰の父と呼んでいるのです。生まれた時の名前は「アブラム」(高められた父)、99歳の時に神様から与えられた「アブラハム」という名前は、多くの国民の父という意味です。「アブ」とは、父という意味ですね。

ここに「恵みによるためである」「信仰によるのです」「約束」ということばが出てきますが、これらは基本的に同じことです。信仰による、約束による、恵みによる。つまり、人の行いによらないで、信仰によるのだ。人の行いによらないで、神様の約束によるのだ。人の行いによらないで、神の恵みによる。全く同じことを、違う表現で言っているのです。

6 恵みを受けた人 チャック・スミス先生

このことばを見ると、私はどうしてもチャック・スミス先生を思い出してしまうのです。私の娘はベンチュラという所でハイスクールを卒業しました。ケビン・コスナーが卒業した高校として知られているのですが、チャック・スミス先生は、ベンチュラにある小さな教会の熱心な信徒の子どもとして生まれました。両親の良き教育、教会の愛を受けてすくすくと成長し、若いうちからその心を神様にささげ、神様のために働きたい、伝道したい、福音を伝えたいと燃えていました。

彼は18歳でホープカレッジに行きましたが、「どうして私はホープカレッジに行くのだろうか。私が説教すれば、人々はすぐに、何百人でも救われるのに」と思いながら、教団の規約に従って入学したのです。一生懸命勉強しましたが、「早く伝道に出たい」と思っていました。

卒業した時、教団から、アリゾナ州のタスコンという場所の小さな教会が与えられました。しかし、100人、1000人が救われる所ではないということを見つけたのです。教会は小さなままで、成長しない。初めの17年間、チャック・スミス先生の伝道は、ほとんど実を結びませんでした。何度も教会を変ったので、17年の間に、17回、家族は引っ越しをしなければならなかったと「収穫の時代」に書いてあります。

教会が小さいために、当然ですが、彼は十分な給料を得る事ができない。家族を養うために、大工をし、スーパーマーケットで仕事をし、経済的には絶えず困窮していたのです。最後は、アルバートソンというスーパーマーケットのチェーン店で、アシスタントマネージャーをしながら牧師をしました。すると、「お前は優秀なマネージャーになる事ができる」と言って、アルバートソンがチャック・スミス先生を雇おうとしたのです。これで経済的苦労は終わりになる。しかし、牧師を辞めるという条件がついていた。土曜日も日曜日も、スーパーマーケットは開いているから、牧師をしながらマネージャーをするのは、不可能だ。

チャック・スミス先生は、今まで何回か繰り返して来たお祈りを、神様にささげました。「神様、どうか、私の召しを変えて下さい。あなたは私を牧師、伝道者として召しましたが、どうか、この召しをビジネスマンに変えて下さい。私はビジネスの方が得意だと思います。このようにして、難なく人々から認められることができるのですから。

私が稼いだお金は、ミニストリーのためにささげますから、どうか私を、牧師からビジネスマンに変えてください」。

しかし、神様は赦してくれなかった。というよりも、教会を転々とせざるを得ない中で、落胆と失望の繰り返しではあったけれど、彼の内側には福音を伝えたいという情熱があつて、その情熱だけは消えなかったのです。

そうこうしているうちに、会員が25名の、牧師のいない教会から、「牧師になってください」と招聘がありました。その時、彼は50人の教会を牧会していました。そのうち15人は親戚だったそうです。25名の教会では、給料はさらに払えないだろう。しかし、その招聘に応じて着任したのが、「カルバリーチャペル」だったのです。

しばらくして、人々が増えてきた。長い話はできませんが、当時あふれていたヒッピー達のために祈って近づき、彼らが救われるようになった。そして、不思議な方法で12000坪ほどの土地を手に入れることができた。競売にかかっていたのですが、その競売に指値をする者が誰ひとりおらず、最低の値段で指値をしたカルバリーチャペルにその土地がまわってきてしまったのです。

まず、彼らはその空き地にテントを張りました。そこで礼拝を始めると、あまりにも多くの人があるので、礼拝堂の建築計画を変えなければならなくなった。しかも、何と彼らは教会堂を建てるまでに、6回も設計を変えなければならなかったのです。みるみるうちに人々がテントの中に集まって来て、救いを受け入れて、教会があつというまに巨大になっていきました。今は数万人の信徒がいらっしゃるでしょうし、10年前飛行機の中でロサンゼルスタイムスを読んでいたら、アメリカにおける25のメガチャーチのうち、12番目はカルバリーチャペルだと書いてあつた。何千人という牧師、弟子が生まれ、何千という教会が生まれ、何千人と言う宣教師が世界に遣わされています。

チャック・スミス先生は、「私が優秀な牧師だからこのような発展を遂げたのではない。私が大きなビジョンを掲げたからでもない。私が10年計画、20年計画を立てたわけでもない。私は理想的な教会の大きさは275人くらいだと思っていた（収穫の時代から）。私は大きな教会を求めたことも、そのために祈ったことも、想像したこともない。実に思いもよらないことが、私の見ている前で、あれよ、あれよ、あれよと言う間に起こっていたのだ。主の霊によつたのだ。主の力によつたのだ」。17年間辛い経験をしたチャック・スミス先生は、これだけの成功をしても、謙遜にそうおっしゃるのです。

チャック・スミス先生は、ここに書いてあるように、世界の相続人となったと言う事ができると思います。世界の相続となることは信仰によるのであり、恵みによるのだと書いてありますね。

7 無いものを有るもののようにお呼びになる方

ここにおいて、パウロはアブラハム個人の信仰について説明しています。アブラハムは大いなる祝福を受けました。今日アブラハムの子孫たちは、地のチリのように、空の星のように、海辺の砂のように多い。実に彼は多くの、諸国民の父となったのです。17節「このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです」と書いてあります。アブラハムが信じた神は、どういう神であつたか、それは死者を生かす神であり、無い世界、無の世界に向かって「あれ」と宣言するならば、無いものから、あるものが存在するようになる、そういう神を信じたのです。

創世記の創造の記事を見ると、本当にそうです。「初めに、神が天と地を創造した。地は形がなく、何もなかった。やみが大いなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。」神の霊はその上を踊っていたと書いてあるのですが、「そのとき、神が『光よ。あれ。』と仰せられた。」そのようにして、「天体が造られ、植物、動物が造られていき、そして人間が造られた。神は無いもの、無にむかって、有るようにと呼びだした。神はことばを語る事によって、無いものの世界から、あるものの世界に、あらゆるものを呼び出したのです。

ホライズンも、20年前は存在しませんでした。皆さんもいらっしゃらなかったし、建物もなかった。どうしてこういう教会が生まれたのかと思いますが、恐らく神様は、無いものを有るもののように呼びだして下さったのだろう。それだから、今はホライズンと言う教会があるのだろう、と思うのです。

8 望み得ないときに、望みを抱いて

「彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。」これがアブラハムの信仰の特徴です。彼は望み得ないという状況に追い込まれて、それにも関わらず望みを持ったのです。

「それは、『あなたの子孫はこのようになる。』と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだは死んだも同然であることと、サラの胎の死んでいることを認めても、その信仰は弱りませんでした。彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。」

パウロはこのように数行で、アブラハムの信仰についてまとめています。一口で「信仰によって義とされる」と言う。私はそれを45分でまとめて話すことができ、信徒達は一つのメッセージで信仰によって義とされるのが理解できる。CDを何回か聞けば、そのことがはっきりとわかる。よい書物によっても理解できる。しかし、アブラハムは、信仰によって義とされるということを、実際に生活する中で、学ばなければならなかったのです。

私達も同じです。私達は牧師の説明を聞き、よい書物を読むことによって「わかった。信仰によって義と認められる。そうなんだ」と言う事ができます。では、私達の実際の生活ではどうなのか。

アブラハムを通して、それを検証してみましょう。

9 アブラハムはどのようにして望みを抱いたか

①祝福の約束

創世記12章を開きましょう。

アブラハムの父親はテラと言いましたが、彼は家族を連れてカナンへの旅に出発しました。途中、カランというオアシスに到着して、「ここでしばらく休もう」と言った。そこで二週間、一月、三か月、休んで力を得て、カナンに向かえばよかったのですが、カランは水が豊かで緑があります。「ここはなかなかいい所だ」と、そこにとどまり、そこに住みつき、そしてそこで死んでしまったのです。

父親のテラが死んだ時、「その後、主はアブラムに仰せられた。『あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。』」（創世記12:1）

そして、そこに7つの祝福が約束されました。

- ① 「そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、」
- ② 「あなたを祝福し、」 繁栄させるということですね。
- ③ 「あなたの名を大いなるものとしよう。」

古代においては、名が大切だったのです。名前に誉れがあり、名前が尊敬されました。アメリカの指折りの図書館であるシカゴ図書館には、何十万冊、何百万冊の本がありますが、その中で最も引用されているのがアブラハムの名前だそうです。すごいお話です。天文学も、物理学も、歴史も、社会学も、文学も、色々な分野があるでしょうけれど、アブラハムに関わる文書が最も多い。実に、彼の名は、大いなるものとなりました。

- ④ 「あなたの名は祝福となる。」 ニックネームは祝福。アブラハムということばを聞くと、人々は祝福ということばを思い出すのですね。
- ⑤ 「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、」 あなたの味方の味方となると主は言われた。
- ⑥ 「あなたをのろう者をわたしはのろう。」 あなたの敵の敵となる、と主は言われる。
- ⑦ 地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

これらの祝福を二つに総括しますと、第一番目に、神は「アブラハムよ。私はあなたを祝福する。」と言う内容です。第二番目に「すべての人はあなたによって祝福される」ということです。「アブラムよ。まず、あなたは私から祝福を受ける。そして、受けた祝福を人々に渡すのだ。」そのように神は言われたのですね。

②神を信じて出発

アブラムは、主がお告げになった通りに出かけた。ロトも彼と一緒にでかけた。アブラムがカランを出た時、75歳であった。どうして、カナンに向かって行ったか。それは、彼が神のことばを信じたから。信じたから、行動を起こしたのです。75歳の時です。

彼がカナンに来ます。2年くらい経てば、最初の子どもが生まれて、次の子どもがみごもられていてもよい頃だと

思います。神が現われて、繁栄を与えるとされたのですから、大いなる繁栄を経験してもよい時期でしょう。しかし、何と、子どもが生まれるところではない、繁栄するところではない。飢饉が襲ってきて、食べることに困り始めたのです。「話がちょっと違いますか、神様」みたいな感じですね。乳と蜜の流れる地と言われて来たのに、実はそこは飢饉だったのです。

彼は、食べるものを求めてエジプトに下りました。失敗がありながらも、祝福が与えられる。エジプトの王に「出て行ってください」と追い出され、カナンに帰ってきて、ベテルとアイの間でテントを張りました。そこでアブラハムの羊飼いとロトの羊飼いの間で争いが起こった。水や放牧地を争ったのです。アブラハムの家畜も、ロトの家畜も大いに増えてしまうほど、祝福されたのですね。

「私達、親戚同士が争ってはいけない、別れましょう。ロトよ。お前が右に行くなら、私は左に行こう。お前が左に行くなら、私は右に行くよ」。ロトは、ヘブロン山地を見渡し、それからヨルダンの低地を見渡すと、ヨルダンの低地は青々と繁って美しい。イスラエルを旅行すると、ほとんどが植物のない枯れた地です。しかし、はるかかなたに、美しい緑の地が現われると、そこはエリコです。そこに実るグレープフルーツはスイカのように大きい。2つの大きな泉があるからです。そんな感じの、みずみずしいヨルダンの低地帯、ソドムとゴモラの方面を見た時、ロトは「おじさん、ソドムとゴモラの方面に行くよ。いいかい」「わかった。私は山地、ヘブロンの方に行く」と言って、別れたのです。

③地のちりのように

14節から見ましょう。「ロトがアブラムと別れて後、主はアブラムに仰せられた。「さあ、目を上げて、あなたがいる所から北と南、東と西を見渡しなさい。」丘の頂上に立って、ぐるりと回って見た。すると主は、「わたしは、あなたが見渡しているこの地全部を、永久にあなたとあなたの子孫とに与えよう。わたしは、あなたの子孫を地のちりのようにならせる。もし人が地のちりを数えることができれば、あなたの子孫をも数えることができよう。立って、その地を縦と横に歩き回りなさい。わたしがあなたに、その地を与えるのだから。」とおっしゃるのです。

これは初めに神様から聞いたことばと、意味は同じです。「わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。」ことばは違うけれど、同じ意味ですね。「あなたの子孫を地のちりのようにならせる」

皆さんは、この部屋の中で何万というちりがうごめいているのをご存じですか。目には見えないけれど、ちりだらけです。掃除を怠ったからではありませんが。そのちりのように、とても数えることのできないおびただしい子孫が、あなたから生まれると説明したのです。

同じことばを聞いたのですが、以前はカランという、まだ約束の地が見えない所で神様のことばを聞きました。今は約束の地に立って、その約束の地を見渡すことができ、歩くことができる。そこで神様のことばをいただいたのです。アブラムは、神様のことばを信じたことの証拠として、神様のために祭壇を築きました。「神様、おことばを感謝します。あなたのおことばが実現し、私の子孫が地のちりのようになることを信じます。」そう祈って礼拝した。

④疑いながら、信じた

それから数年経つのですが、15章「これらの出来事後、主のことばが幻のうちにアブラムに臨み、こう仰せられた。「アブラムよ。恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きい。」

アブラムは、興奮して、感謝したでしょうか。今回の応答は、かなり違う者でした。「神、主よ。私に何をとお与えになるのですか。」あなたの受ける報いは非常に大きいと言われますが、何をとお与えになるのですか。「私にはまだ子どもがありません。私の家の相続人は、あのダマスコのエリエゼルになるのでしょうか。」さらに、アブラムは、「ご覧ください。あなたが子孫を私に下さらないので、あなたがくださらないのです。私の家のあの異邦人の奴隷が、私の資産を受け継ぐのですよね。跡取りになるでしょう。」と申し上げたというのです。

ここにおいて、アブラムは神様のことばに疑いを持っている事がわかります。「あなたは大いに祝福するとおっしゃるけれど、もう結構です。金銀も十分にあるし、家畜もたくさん持っています。問題は子どもがいないことです。あなたは大いなる国民にするとか、地のちりのようにするとかおっしゃいますが、私には一人の子どももいないので

す。まず一人お与えくださらなければ、何も起こりません。それだけではなく、アブラムの心が苦い気持ちになっています。あなたが私に子孫をくださらないのだ。もし、あなたが私を放っておいてくれたら、子どもが生まれたでしょう。あなたが私の人生に入り込み、介入したために、あなたがあえて、あなたの意志で、子どもをくださらないんですね」と言っていますね。

ですから、アブラムは「私の奴隷が跡取りになるんでしょうよ」と言って、神様に皮肉を言ったのです。希望が実現するのがあまりにも遅い時に、人は落胆し、失望し、苦い気持ちになり、皮肉っぽくなってきます。アブラムが皮肉っぽい人だったとか、苦々しい人だったのではありません。彼が落胆していたので、このように苦々しく語り始めたのです。神に対して苦みがあり、落胆していた。希望が薄れ、期待が外れていたのです。約束のこぼを繰り返していただいて、「大いなる国民にするよ。」「空の星のようになるよ。」「地のちりのようになるよ」と言われても、それが実現するための、最低のことすら起こっていないのですから。10人くらい子どもが生まれていて、「神様、遅いですね、このペースでどうして、地のチリのような子孫が私から生まれるでしょうか」と言っているのではないのです。一人も生まれていないのです。アブラムが文句を言うのは無理がないと思います。

すると、5節、「外に出てこいよ。テントから出て来いよ」と神様は仰せられた。夜中だったのですね。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」

私はシナイ山に三回登りました。セントカタリーナ寺院という修道院に泊まり、朝2時に出発します。二月の終わりであっても、砂漠の真ん中なので、日中の太陽を避けるために、午前中に山から下りてきたい。それで、午前2時に出発するのです。眠い。しかも、旅行中ですから、疲れているからだを起して山に上る。しかし、修道院を出た瞬間に、目の前に満天の星空が展開していくのです。それは美しい星空です。東京でも星は見えますが、シナイ山では人家がなく、修道院しかない。人が全く住んでいないその場所で見える星空には圧倒されます。しかも、アブラムが見た星空は、今から4000年前です。もう星でいっぱい。空間よりも星の方が多かったに違いありません。

「アブラム、さあ、空の星を数え始めてご覧」主は言われた。空の星は、海の砂のように、地のちりのように多いそうです。科学者達は宇宙の広さは150億光年だと平気で言いますが、地球で光ったその光が、150億年後に届くという、いかにこの宇宙が広大であるか。

星空に感動したこともあるかもしれませんが、「彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」ここから、信仰義認という有名なことばが生まれているのです。アブラムは主を信じた。主の約束を信じた。私の子孫はこの空の星のようになると信じた。それは恵みにより、約束によるのです。アブラムの行いによるものではありません。ただ、神様の一方的な約束を信じたら、義と認められたというのです。

⑤肉の子どもイシュマエル

16章。そろそろ2～3人の子どもができていますよね。しかし、「アブラムの妻サライは、彼に子どもを産まなかった。」

カランから出てきて、もう10年間も経っている。神様が現われて、「大いなる国民とするよ。地のちりのようにするよ。空の星のようになるよ。信じるか」「はい、信じます」。しかし、信仰しているなら生まれるはずの、信仰の実が生まれてこないのです。

サライも疲れに、疲れしました。アブラムよりも苦しかったのは、女性の方、妻の方です。子どもが生まれません。石女（うまずめ）だと言われる。彼女は、信じたでしょう。期待したでしょう。希望を持ったでしょう。祈ったでしょう。いつ、妊娠できるだろうか。ついに、サライも落胆してアブラムに言った。「ご存じのように、主は私が子どもを産めないようにしておられます。どうぞ、私の女奴隷のところにおはいりください。たぶん彼女によって、私は子どもの母になれるでしょう。」

女主人に子どもが生まれませんなら、女主人の奴隷を与えて、その奴隷によって子どもを産み、その子どもを女主人のものとする。そのようなことは、その当時、常識的に行われていたのです。それにしても、サライもアブラムも、10年間その手段をとらずにいた。当時の文化の中であれば、遅すぎた。しかし、信じて、待って、疲れきって、落胆して、失望の果て、絶望して、サライは「奴隷女によって子どもをもうけてください」と提案したのです。

サライの言うとおりにテントに入った。すると、すぐに女奴隷は妊娠して、イシュマエルが生まれた。黒い、褐色の子どもで、生まれながらに元気いっぱい。強いだけでなく、非常にすばしっこい。運動能力が非常に高い男の子が生まれました。アブラハムは「やった～、ついに息子を持った」と思ったが、神様は「だめだよ。その子じゃないよ。あなたの子どもはサラから生まれなければいけないよ。奴隷の子から生まれたんでは、だめなんだよ」。

神様は、イシュマエルは「約束の子ではない。信仰の子ではない。むしろそれは、疑いの子どもであり、落胆の子どもであり、失望の子であり、絶望の子だ。それは信仰の子どもではない」と、拒絶したのです。

10 疑いは、不信仰ではない

ここにおいて、私は皆さんに、疑いと不信仰の違いを説明しなければならないと思います。恵みとあわれみが微妙に異なっていたように、不信仰と疑いは微妙に違うのです。

不信仰は、英語ではunbeliefです。疑いは、doubt。unbeliefというのは、神を信じない事、神を否定する。神の存在を信じない。神の愛を信じない。神を礼拝することはしない。神に祈りなどしない。信仰には何の役にもたたないと決めている。これが不信仰です。

疑いというのは、信じたいけれど、信じられない。信じる事ができない。信じきるほどの忍耐がない。我慢できない。どうしても疑いが入ってきてしまうということです。

実をいうと、アブラハムの物語がそうであり、多くの人物伝がそうであるように、「疑い」というのは、「信仰」の一部なのです。聖書の人物の中で、疑い無く神を信じていた人は、一人もいないでしょう。確かに、子どものように素直に神を信じる信仰がありますが、しかし、それは子ども時代のことです。私達が青年になり、ヤングアダルトになり、大人になり、老人になっていくプロセスで、そのような純粋な信仰を保ち続けることはできません。神を信じ、神の約束を信じ、恵みを信じていても、落胆に襲われ、失望に襲われるのです。時には、希望が全く見えない時が来ます。心の中が疑いでいっぱいになって、「神はもう私を愛してないのではないだろうか。神は私を見捨てているのではないか。信仰を持つことに何の効き目があるか。祈る事に何の力があるのか。こんなに信じて、こんなに祈って、こんなに待ったのに。」「私はもう2週間も待ったのに、こんなに神は私を待たせて」という短気な人もいるかもしれませんが、私達の中に疑いが入り込んでくる。そして、疑いが入り込んでくるのは、ごく普通のことです。

信仰というのは、疑いが入り込んできて、その疑いを乗り越えることです。疑いがないということではありません。疑いは常に私達に入り込もうとし、落胆した時に、失望した時に、どうしてもそれが入り込んできてしまう。それをストップしたい。でも、なかなかストップしきれない。

アブラムもそのような疑いの経験をしたのでした。落胆し、失望し、希望がなかなか実現しない中で、彼はこのように疑いをもち、それに基づいて行動して失敗をしてしまいました。

⑥笑ったと言われ信じた

アブラムが86歳の時にイシュマエルが生まれたのですが、17章、「アブラムが99歳になったとき、」カナンに来てから、24年間も経ってしまいました。もうこの頃には子どもが7～8人、生まれていてもいいかなと思いますが、「主はアブラムに現われ、こう仰せられた。『わたしは全能の神である。あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ。わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に立てる。わたしは、あなたをおびたしくふやそう。』」

また、同じことばです。基本的には、神様は繰り返し、繰り返し、神が現われては、一つの約束を与え、ことばを与えている。でも、何一つ実現していない。

15節「また、神はアブラハムに仰せられた。「あなたの妻サライのことだが、その名をサライと呼んではならない。その名はサラとなるからだ。わたしは彼女を祝福しよう。確かに、彼女によって、あなたにひとりの男の子を与えよう。わたしは彼女を祝福する。彼女は国々の母となり、国々の民の王たちが、彼女から出て来る。」

主がこれほど明確に、サラから一人の男の子が生まれると宣言したら、アブラハムは感動し、感謝したでしょうか。17節を見ると「アブラハムはひれ伏し、そして笑ったが、心の中で言った。『百歳の者に子どもが生まれようか。サラにしても、九十歳の女が子を産むことができようか。』」

私は、アブラハムの笑いをかなり研究したのですが、恐らく彼は「ぷっ」と吹き出してしまった。神様に見られる

とまずいので、ひれ伏しながら「ご冗談は、もうやめてください」と言いたかったに違いありません。

ここにおいて、アブラハムは苦い気持ちになってはいないようです。皮肉な気持ちにもなってはいない。アブラハムは完全に諦めきっているという感じがします。神様に盾ついているのではなく、もう笑っちゃった。「お笑いですか。ご冗談ですか。また、同じ約束ですか。何回、私はそれを聞いて、信じてきたのでしょうか。もう私は信じる事はできません」というふうにして、ぷっと吹き出してしまったのではないかと思います。自分が100歳になって、子どもは生まれないだろう。サラは90歳になって、子どもなんか生まれるはずがないと思ったのですね。

18章に移ります。三人の御使いがアブラハムの所に来た。「わたしは来年の今ごろ、必ずあなたのところに戻って来ます。そのとき、あなたの妻サラには、男の子ができています。」今度は時間の指定までされました。「サラはその人のうしろの天幕の入口で、聞いていた。アブラハムとサラは年を重ねて老人になっており、サラには普通の女であることがすでに止まっていた。」生理が、もうなくなっていたのですね。「それでサラは心の中で笑ってこう言った。『老いぼれてしまったこの私に、何の楽しみがあるろう。それに主人も年寄りで。』

ここで、サラはどういうふうにしたのでしょうか。「はははははっ」何とも言えない悲しみに満ちた、しかしもう諦めに満ちた笑い。諦めると人間は平安になるのです、仏教で一番大切な教えは、諦めるということです。執着心を捨てること。諦めると平安が来る。希望を持って平安に満ち溢れるキリスト教とは、全く反対ですが。諦めたから、神に対する怒り、神に対する苦い気持ちがなくなっているのです。

妻はよく、「私は諦めたから、あなたと結婚したのよ」と言います。それが真実であることを私は知っています。諦めるということの中には平安があるのです。アブラハムも、サラも、諦めたのです。だから、そのような笑い声を挙げてしまったのですね。

私達は、アブラハムも、サラも、初めから終わりまで、偉大な信仰者であったと思い込んでいます。でも、よく聖書を読んでみると、私達と変わらないではないですか。主はアブラハムに「サラはなぜ笑ったんだ」「笑うのか。主に不可能なことがあるのか。」「いえ、私は笑いませんでした」「いや、あなたは確かに笑った」このように、御使いとサラの間でことばのやりとりをする中で、もう一度、サラの中に信仰がよみがえってきたのです。「私は、笑いませんでした」と言って。

この御使いの訪問のために、「もう二度と信じない。もう諦めた。もう神には騙されない」と思っていた二人の心の中に、信仰が再び再生し始めた。「神にとって、不可能なことがあるか。神は真実な方だ。神が約束したなら、その約束は実現するのだ。神は約束のことばを与えているんだ。不信仰のゆえに、疑ってはならない。確かに、人間的に見ると私は子どもを持たないし、お前も子どもを持たないけれど、私の体も、お前の体も死んだと同然だけれど、希望は全くないのだけれど、今こそ、希望を持ちながら、信じよう」、と二人は疑いを乗り越えた。諦めを乗り越えた。そして希望が無い時に、彼らは希望を持ったのです。

⑦約束のとおり

21章、「主は、約束されたとおりに、サラを顧みて、仰せられたとおりに主はサラになさった。」色々なことがありました。25年間かかった。疑ったり、皮肉になったり、落胆したり、失望したり、絶望までした。それにも関わらず、主は約束されたとおりに、仰せられたとおりに、サラになさった。これは、恵みですね。彼の信仰が偉大だったから、神がしたのではないでしょう。恵みによって、したのでしょう。「サラはみごもり、そして神がアブラハムに言われたその時期に、年老いたアブラハムに男の子を産んだ。アブラハムは、自分に生まれた子、サラが自分に産んだ子をイサクと名づけた。」イサクというのは、笑いという意味です。アブラハムが神様のことばを聞いた時に笑ってしまったことを思い出すために。サラが笑ってしまったのは不信仰な笑いだったことを思い出すために、神はイサクという名前を与えてくださいました。

6節「サラは言った。「神は私を笑われました。聞く者はみな、私に向かって笑うでしょう。」神様は祝福の笑いを持って、サラを笑ったのです。人々は、「うちのボス、すごいぜ、100歳だよ。サラも90歳だよ。すごいね、あんな歳で男の子を産んじゃったよ」と、みんなで大笑いしました。大宴会が開かれました。盛大な宴会の中で、笑い声が、健全な心の中から湧き上がる大いなる笑いで、アブラハムも、サラも、人々も笑ったのです。

私達は、一口に信仰義認と言いますが、アブラハムは25年間かけて、信仰によって義と認められることを体験し、学んでいったのです。私達は、信仰の原理について理解する事ができるようになりました。それを私達の人生の中で体験していきましょう。

お祈りします。愛する天のお父様、実に私達は、値なしに、無代価で、キリストが払ってくださった血の代価によって、贖いによって、一方的な恵みによって、信じるだけで救われ、義と認められますが、それは信仰生活の始まりでした。一生は長く、時には厳しく、時には苦しく、辛く、時には悲しいのです。しかし、私達がアブラハムから学ぶことは、彼が素直な偉大な信仰者であったことではなく、人生の悲しみ、辛さ、苦しき、一生の間テントに住むという生活の中で、落胆があり、失望があり、絶望があっても、しかし、神を信じる事、礼拝する事を、彼はやめなかったという信仰の姿です。諦めの中でも、失望の中でも、神を信じ、その信仰がついには、「約束された方は真実であるから、必ず実現するに違いない」と信じられるようになれました。

私達も、今、信仰を学んでいるところです。色々なことが起こる実際の人生の中で、私達が信じるということを教えてください。あなたを信頼して、あなたを礼拝し続けている人達、困難も多いのです。落胆も、失望も多いのです。期待はずれと思う事も多いのです。どうか、この尊い信仰を貫くことができるように、主よ。私達をあわれんで、助けてください。イエス様のお名前によってお祈りいたします。アーメン。